批評

書評：*Sexuality, Disability, and Aging: Queer Temporalities of the Phallus*

（セクシュアリティ、ディスアビリティとエイジング ――ファルスのクィアな時間）
Jane Gallop 著、Duke University Press、2019 年、137 ページ

欧　陽　珊　珊*

本書は、老いに伴う心身機能の低下によって生じる障害 late-onset disability [1] を有する人たちの性的な経験を考察するものである。従来の生殖能力を中心に強調されているセクシュアリティとエイジングの関係性は、late-onset disability によって、生殖能力がなくなることを危機とするものである。しかし、本書は老いによる能力の喪失といった「衰えの物語」（11）に異議を唱える。規範的なライフコース（すなわち、誕生、結婚、生殖、死）を拒絶する「クィアな時間性 queer temporality」を導入することで、障害や老いがより反規範的、脱二項対立的な可能性を持つことを示すのが本書の目的である。

著者の Jane Gallop はフェミニズムと精神分析を専門としているアメリカの比較文学者である。本書で著者は、加齢に伴う病気によって、歩くまたは立つ能力が徐々になくなり、車いすユーザーになったことを告白する。Robert McRuer、Eli Clare による「ディスアビリティとはクィアであり、クィアよりクィアであり、規範性に抵抗するためのより強力な方法、より徹底的な身体的差異の全肯定」（2）と述べるクリップ理論 crip theory の主張に共鳴し、自身の経験を取り上げ、文学作品のクィア・リーディングに加え、障害、老いとセクシュアリティが交差し合う関係性を明らかにする。

本書は四章で構成される。

序章の前半では障害学、クィア理論とエイジング・スタディーズを接続する議論と理論の発展を検討し、「逸話的理論」（27）という分析方法を説明する。後半ではエイジングと精神分析におけるファルスと去勢との関係性の考察を行う。著者は「late-onset disability もエイジングも一般的に、自身のセクシュアリティとジェンダー（いかなる性自認かに関わらず）に対する脅威として経験される。この切迫したジェンダーとセクシュアリティとが絡み合う喪失感を、去勢不安の一形態として規定する」（15）と述べる。著者によれば、精神分析では、去勢不安の状況において、ファルスとは、時間的概念にならざるを得ない。なぜなら、ファルスは現在も存在するなら、将来突然消える恐れがあるし、不在であるならファルスが存在したが過去のある時点で痛みを伴って切り取られたという前提を持つからである（19-20）。本研究の狙いは、Jan Campbell における「ファルスをクィアする queering the phallus」概念や、Judies Butler の「クィアなファルス queer phallus」概念を広げ、「（まだ）正式名称を付けられない存在の誤称であるとしてのファルス」（25）を指摘し、最終的に失うものという標準的なファルスの時間のかわりに、ほかの時間を探求することである。

第一章「ハイヒールと車いす」では、著者のニューヨークの旅行経験を描いている。ハイヒールが好きな著者は、加齢により足の障害が悪化し、ハイヒール（本書では性的な欲望や快楽の意味を象徴するものとして説明される）を履けなくなり、最後には車いすを使うようになった。この経験を「悲惨な喪失 catastrophic loss」（33）と感じた著者は、Gullette による中年期の喪失と衰えを経験する時間性に共感する。この時点では、この経験は去勢の物語であると位置づけられた。しかし物語のエンディングで、自宅でセックスをしている著者は、車いすでショッピン

＊立命館大学大学院先端総合学術研究科　2018年度入学　公共領域
日本学術振興会特別研究員（DC1）

グモールに行ったイメージを想起する。ショッピングモールで騒がしい若者に囲まれながら無視されている状態を思い出し、巨大なペニスで射精する空想から得た快感は、現実のセックスの快楽と繋がっていた。著者は、障害と老いによって喪失したファルス（ここでのファルスは肯定的なファルス・アイデンティティが「ハイヒール」として象徴されている）が、車いすに座った状況で戻ってきたと感じ、この出来事を「不意のファルス／ファルスの突然の出現 phallic surprise」（37）と呼んだ。

次に、著者は生殖セクシュアリティの規範から解放されれば、別の時間性に入ることができる（63-64）と指摘する。例として『チャタレイ夫人の恋人』の最終章を取り上げ、戦傷により下半身不随となることに従って「喪失」を経験した後のチャタレイのセクシュアリティについて分析する。車いすに座ったチャタレイと、彼の世話をしているボルトン夫人は、軽いキスなどの挿入を伴わない行為でお互いに高揚する。そのシーンについて、著者は男らしさでもなく、子供でもなく、女性を妊娠させることでもない「倒錯したファルス perverse phallus」の時間であると解釈した。そこでは、ファルスは去勢後に再び取り戻されるというオルタナティヴな時間性を示唆する。

第二章「ポストプロステイト・セックス」は、著者のパートナーが癌によるポストプロステイト（前立腺切除術後）、射精を介しないセックスの経験や二人の関係の変化についてのメモから始まる。セックスの規範的な目的論は「放出」「射精」である（81）ことに対して、著者は夫との経験からポストプロステイトによる性的反応を再考し、性行為の途中「尿道球腺液 pre-cum」が出現して射精せずに終了する現象を「規範的セックスの目的論からの逸脱」（81）として肯定している。

この章はまた、前立腺切除術後の状況に類似している Philip Roth の小説『Exit Ghost』と重ね合わせ、老いとセクシュアリティの医療化を併せて解読していく。「ポストセクシュアルとしての高齢者」と「若者と同様に（医療薬のおかげで）機能をもつ高齢者」である二つの標準モデルとも、小説の主人公から力を奪っている。だが、この主人公の「去勢したときの年齢の後、未成年期のようなファルスの若さ phallic youth を感じた」（91）という経験は、どちらにも位置していないと指摘する（106）。著者はこの分析から人生と共に育むセクシュアリティの再考を提唱し、一方向的な発達の時間の代わりに、「中間的な時間性 in the middle temporality」の重要性を訴える。

終章で著者は「永遠 forever」と記された概念化に反対すると明言した。したがって、「セクシュアリティは加齢によって変化しライフコースを通じて変化することに取り組む必要がある」（107）という Linn Sandberg の観点から、「本質化されたセクシュアリティではなく、縦断的なセクシュアリティの概念」を提唱する（108）。最後に、閉経後の女性の逸話を取り上げ、「年を重ねるごとにアイデンティティがどのように変化したかについて話してくれる人を見つけることによって、アイデンティティについて縦断的に考え始める」（110）ことを提案し、論を閉じる。

本書はセクシュアリティを理解するため、時間性を論じる重要性を強調している。規範的な時間性は、異性愛中心で生殖能力と若々しい身体を特権化する。この規範は、障害があり、老いていく性的な身体に、不安、羞恥、去勢を課している。著者は規範的な時間性に抵抗するため、去勢の繰り返しとファルスの取り戻しや、中間的な時間性の言説など脱生殖、脱規範的な主張を提示した。これらの議論は、障害、老いとセクシュアリティが交差し合うことは、できなくなるという「衰え」だけではなく、より複雑な関係性が生じることを明らかにした。これは障害学やエイジングの研究に対して新たな視点を提供したと考えられる。しかし、本書には方法論的な限界も見られる。本書で言及される「ディスアビリティ」とは身体的な障害に関わる経験であり、能力を喪失していく過程を背景としながら、著者は自身の妄想や文学作品のテクストを通して、主張を検証した。メンタルの問題や精神的な障害、または生まれつきの障害を抱える場合、「倒錯したセクシュアリティを探求し賛美する」（13）プロセスはどのようなもので、本人にとってどのように捉えられるか、実証的な研究はまだ行われていない。さらに、本書の分析は異性愛者の経験のみに焦点を当てている。多様なセクシュアリティの捉え方は今後も検討されていくべきである。いずれにせよ、理論的な議論に留まらず、本書で言う「これは時間の話なのだ it's about time」（111）という視点は、高齢者または障害者のセクシュアリティ問題の新たな分析軸となり得るだろう。

［注］

1　Liang らは、日本の高齢者データを用いて、高齢期に生じる障害のタイプを三つに分類している。early onset disability（生活習慣病

との関連）、late onset disability（加齢による心身機能の低下）と successful aging（病や機能低下から逃れた姿）である（Liang 2003）

［参考文献］

Liang, J., Krause, N., Bennett, J., et al. 2003 Changes in functional status among older adults in Japan: successful and usual aging. *Psychol Aging*, 18, 684–695.